

平成29年度 第2回府中市子ども家庭支援センター運営会議議事録

- 1 日 時 平成30年2月13日（火） 午後3時～午後5時
- 2 会 場 府中市子ども家庭支援センター「たち」ミーティングルーム
- 3 出席者 <委員>
西郷会長、大伴氏、内岡氏、軽部氏、布谷氏、石田氏、月岡氏、伊藤氏

<事務局>
(府中市子ども家庭支援センター)
市ノ川子育て支援課主幹兼子ども家庭支援センター所長
伊藤同センター相談担当主査、大喜多事務、原田事務、笹原相談員
(多摩同胞会) 畑山センター長、寺嶋センター次長
- 4 欠席者 石川氏、鈴木氏、早田氏、森本氏、酒井氏、内田氏、肥後氏
- 5 傍聴者 なし
- 6 議事事項
 - (1) 平成28年度・平成29年度府中市子ども家庭支援センター事業実績（12月現在）
 - (2) 府中市子ども家庭支援センター事業進捗状況及び評価について
- 7 議事内容
 - (1) 平成28年度・平成29年度府中市子ども家庭支援センター事業実績（12月現在）
 - ア 平成28年度・平成29年度府中市子ども家庭支援センター事業実績(12月現在)について、資料2に基づき、事務局より説明。
 - イ 質疑応答、意見等

委員 自分が行っていた際に、9番の「子ども家庭サービス事業」の母子（父子）緊急一時保護事業の数が数年伸びず40前後くらいで推移していたが、去年度に入って196と、その数にちょっとおどろいた。相談事業の内容的には件数に変わりないとのことだが、増えた理由として、希望者が多いのか、保護をしないといけない方が増えてきているのか、それとも、数的にはそんなに変わらないが、保護法的に行く場所が決まらない方という事か。数の内容、どういった経緯で入られたのかというところを教えていただきたい。

事務局 9番の母子緊急一時保護事業について、先ほど委員の方からの指摘どおり、相談者の方が次にどちらに行くかというのに時間がかかるケースが増えていると聞いている。通常1週間程度の利用で、次の支援を決定する事が多いが、今回は

1か月かかるようなケースや、兄弟で利用等が多い。延べ日数の件数となるので、急に件数が増加する要因となっている。

委員 母子緊急一時保護事業の件数の多さにおどろいた。親支援は、保育園でも必要だという思いが強くなる。11番の「親支援事業」の講座が減った理由や、実施回数1回の理由を教えてください。

事務局 「しらとりNP」というのは、ノーバディーズパーフェクトの略になる。利用された方には好評で、今後も続けたいという声はあったが、参加者は7回全部出席する方は10組程度と限られており、ノーバディーズパーフェクトと同じ内容でより多くの方に聞いていただけるように講座形式に見直した。実施は1回だが、参加人数は29名と倍以上であったが、開催の形態については研究していく。

委員 親子の講座を地域の保護者はこういった形で知るのか。

事務局 「広報ふちゅう」や、子ども家庭支援センターでチラシ配布を行っている。

委員 30年度も1回の実施予定か。

事務局 30年度については、1回ないしは2回程度で考えている。

委員 今年の参加者が来年参加する場合はあるのか。

事務局 参加可能だが、なるべく多くの方にとっている。

会長 ノーバディーズパーフェクトとは少し違う感じがする。

事務局 講座形式で、内容は、ペアレントトレーニングのように、育てにくい子や親に対しての対応策等の話をしている。

会長 講座形式がいけないという訳ではないが、NPの時と目的が違うと思う。NPは、確かに生産性は低く、より広くということで、講義形式の講座を行う事自体は賛成だが、親のトレーニングはNP以外にもあり何を選択するかだが、どのプログラムもほとんど1回きりというのではない。自己覚知というか、親自身が自分の子育てについて、ないしは自分の気持ちの状態について理解し、自分をコントロールし、適切に子育てができるか、1回でも気づきにはなる。しかし、さらに詳しく知りたいという受け皿がこれではなくなっている気がする。困難な方が対象と想定されているが、一般の人でも子育ては初めてであり、学んでみたいと思っている人達はいるはず。今後、全体の構成と目的、多様化するニーズの関係から整理するとよいかと思う。この講座も機能するようになり他との連携がとれるようになるかと思う。

事務局 ノーバディーズパーフェクトは、全7回全て参加という縛りがあり、参加しづらい方もいると思う。どの辺りが参加しやすいかも含め、各委員の意見を参考にし、より良い方法を考えていく。

会長 ノーバディーズパーフェクトにこだわらなくてもいい。ポジティブ・ディシプリンというのもある。確かに7回全部出るのは、忙しいお母さんが参加するのは難しい。プログラムは幾つもあるので検討いただきたい。

数年前の総務省が行った調査では、虐待が乳幼児については一定程度の歯どめが今の施策ではかかりつつあるが、学齢期以降についてはなかなか難しい。学校

というのは、学齢期の子どもたちや親にとって重要な居場所である。家庭が見えている立場から、教育委員会、指導主事、指導室の委員、意見質問等あるか。

委員 質問だが、総合相談事業の中で、児童虐待の相談が166件となっているが、この内訳の数と、この相談にあがったのものは、児童相談所と一緒に対応しているという内容なのか。それともその前の段階なのか聞きたい。

学校も苦慮しているケースが非常に多いので、ケースの難しさ等伺いたい。

事務局 166件は、12月末の数字。12月末までの数字の解説については、後程説明する。

事務局 学校からの通告も件数が増えてきている。子ども家庭支援センターの判断で、緊急受理会議等を行い、児童相談所に送致するケースや、そのまま継続し対応しているケースと、両方この166件の中に含まれ、児童相談所に送致する件数は割と少ない。

子ども家庭支援センターで継続的にかかわっていくケースが多く、警察からの身柄通告で一時保護になるケースが結構ある。虐待だと把握していても保護できるチャンスがなかなかなく、児童相談所、子ども家庭支援センターで見守りを続ける中で、警察が介入するケースもある。

委員 166件というのは小学校、中学校だけではないのか。

事務局 違う。166件のうち乳幼児が87件、児童・生徒が79件となっており新規のみ。

166件の内容の内訳は、身体的が132件、性的が3件、心理的が12件、ネグレクトが19件となっており、身体的虐待が全体の79.5%を占めている。次が19件のネグレクトで11.4%。件数は少ないが、3件の性虐待の疑いもある。

会長 全国的な傾向と比べ心理的虐待が極めて少ないが理由はあるのか。

事務局 統計のとり方に問題があり、泣き声を身体的で取っていた期間もあり、身体的が多くなっている。年度途中で児童相談所からのアドバイスもあり修正をかけている。

会長 先程の話で虐待の件数や、継続支援の扱いになっている子どもの数は減っていないという事だが、それは幼児の部分も、学齢期の子どもたちの部分も同じような傾向なのか。

事務局 継続的に扱っているものについては、大きく減少はしていない。虐待のケースだと長くかかわる事が多く、乳幼児も、学齢期の児童も、同じぐらい継続的に扱っている。

会長 学校と子ども家庭支援センターの連携が昔と比べれば格段に違ってきているが、もう少し違いがあったほうがいい。イギリスなどはソーシャルワークの部門と学校教育の部門の、厚生労働省の福祉の部門と、文部科学省が一体化したような。そこまで子どもに関係が深い組織を一体化することで、子どもに対して、教育、生活、家庭生活の安定などを全部セットでやろうとしている。今、日本は機関が別。一層の連携を期待する。

委員 先ほどの説明で、資料7の中の個別検討会議が昨年度に比べ増加と聞いたが、困難家庭が増えたという理由もあると思う。それ以上に、他機関、学校、児相、警察との連携が強くなった事で増えたのかと感じた。警察が絡んだ個別ケースも15件と非常に多いと感じた。他機関との連携による児童虐待相談だとか、事案の扱いで好事例等

あれば教えて欲しい。

事務局 面前DV等の場合は、警察に書類通告をするよう徹底されてきている。児童相談所に書類通告し、一緒に関わる個別ケース会議を開くようなことも多い。1度保護されたお子さんが家庭復帰するに当たっては、個別ケース会議を開くことになっており、児童相談所と連携が図れるようになってきた。警察が介入した事例は、警察も個別ケース会議に呼んで行っている。

好事例は沢山あるが、見守りを続けなかなか保護のタイミングがなかったが、夫婦喧嘩で警察が介入となり子どもが一度保護されたことにより、介入しづらかった家庭に児童相談所も子ども家庭支援センターも入れるようになった事例がある。

会長 十数年前は警察と上手くいかなかった時代もあったが、今はよい関係。全国の児童相談所の対応件数だが、心的虐待が一番多い。警察が面前DVを、虐待と受けとめ対応をするようになってきており、警察に期待したい。

委員 大人が子どもを守らなければいけない時期に入っていると思う。待機児童ゼロ目標というのは、各地の人たちが対策をし、改善している。国が動いたという例もある。虐待ゼロというのは、府中市からそう発信していけば、地域の人の目も変わり、やっている本人も目が向けられることで、少しは減ると思う。本気でやらないと、子どもたちが傷つき、亡くなってしまうと思う。

府中市では、虐待された子の見守りをされているが、次々にでてくる。対策はされているのか。

事務局 虐待ケースや養育困難ケースが増えている現状の中で、「育児支援家庭訪問事業」というのがあり、定期的に保育士、保健師、専門員、大学生の相談員が訪問し、継続的な支援を行っている。虐待をなくしたいが、現状は思うように減少しておらず、長期戦だと思っている。現状、介入が困難な家庭を閉鎖にならないよう繋いでいつている。

委員 育児支援家庭訪問事業は、何か通告があったからの訪問になるのか。

事務局 通告があった場合、まず調査をする。子ども家庭支援センターで情報収集をし、関係機関、市役所で持っている情報を集めてアセスメントを行う。学校、保育園、幼稚園から通告が来れば出向き子どもや親の状況を確認し、どういった支援が必要か一緒に検討する。

支援を受け入れやすい家庭はいいが、最初から「帰ってください」と拒否も多く、どの様に介入していくかを関係機関と会議を開催し検討している。

委員 隠れ虐待もあると思うので地域の人など、何か打ち出さないといけない時期ではないか。見守りがなくなり、手が離れたという改善された件数も知りたい。

事務局 29年度の12月現在、166件のうち、非該当も含め終了した件数は57件あり、そのうち23件が非該当。

会長 「非該当」とは何か。

事務局 虐待で通告があり、調査した結果、虐待ではなかったということ。

会長 虐待以外の話はあるか。

委員 主にかかわっているのが、「ひろげよう！子育てひろばのわ」で今年9回目になる。毎年やっていく中で、参加した方から意見要望を聞き、改善しており喜びと達成感でいっぱいだが、この会議にも喜びと達成感を希望している。出席する際、委員の方に、自分の周りの方からのこういうことについて意見を聞きたい等、何かおみやげを持ってきたい。その持ってきたおみやげを市の方が議論していただいて、今度は市のほうから市民の方にお土産というような、繋がりのある会議を希望する。

今回で最後だが、もう少しコミュニケーションがあればよかった。周りの方にどういった会議か聞かれ「お葬式みたい」と答えた。委員が意見交換や、アイデアを出しやすい雰囲気での会議にして欲しい。

事務局も、委員との関わりを考えていると思うが、コミュニケーションが足りないと感じる。

事務局 来年度の「ひろばのわ」の変更点について。第8回目、120人位増加し、周知も進み他市の参加者もいた。

アンケート結果としては、参加できるイベントがちょっと少ない、並んだのに参加券がもらえず参加できない、会場が狭くて行き来に困った等意見があり、ルミエール府中のコンベンションホール全体を使用し実施する。

委員 保育支援課の地域子育て支援担当で、ひろば事業を実施している。16年前に「ポップコーン」という事業を始め、地域のボランティアの方に来ていただいていたが当初からのボランティアの方の高齢化に伴いやめていく方が増えている。「ポップコーン」にはたくさん参加者がいるが、14番の「子育て支援ボランティア養成講座」が29年度より廃止になっており、もったいなく感じる。

去年10月より地域子育て支援センター「はぐ」がオープンし、居場所を求めお母さんたちが毎日多くみえ、お母さん同士の繋がりも出来ており、このような場所を求めている人が多いと感じる。お母さんの話を聞くと、お父さんは仕事で朝早くから夜遅くまでいないので、子どもと二人きりでいるよりは、同じくらいの子どもを持つお母さんと一緒にお昼を食べるのが楽しいとのことで関係が広がっている。

委員 府中市助産師会には、現在27名所属がおり、3分の2が病院に勤務している。府中市内では東府中病院、土屋産婦人科、保健センターと十数勤務している。

私は、10年前から府中市内で開業。府中市との絡みは今までなかったが、2年前に府中市助産師会が発足し、参加することとなった。助産師会の実情を言えば、高齢化が進んでおり今日も2人若い人から辞めたいと連絡を受けた。このままでいくと人がいなくなってしまうと感じる。役割は大事で、新生児訪問という事業があり、唯一1か月未満の赤ちゃんのところへ堂々と入っていけるので、有効的に活用できればと思う。今後、母子手帳発行を面接して渡すこととなり、そこに助産師が入るようになった。初期の段階から色々と問題がありそうな方をピックアップでしていけるのではないかと思う。

私はフリーで働いており、今まで2人位隠れ虐待や、見つけてほしくないが、自

分の体や、子どもが心配だと私のところに来た人もいた。助産師会の仲間に、「このお母さん怪しいよ」と繋げたこともあった。フリーで働いている人とか、病院との連携はとても大事だと思う。

「子育てひろばのわ」にも参加しているが、去年夏に「ママ茶会」を行った。ひろばや自主グループ等で活動されている方が集まった会議で、個人とか数人のグループで、困っているお母さんたちの為に何かしたいという人が大勢いた。そういった人たちを府中市も活用していけばいいと思う。お金が絡むこともあると思うが、やる気があり、お母さんたちのために何か動きたいという人がいっぱいいる。こうした人たちを使えば、明るく元気な府中市になるのではないかな。

会 長 府中市では保育園が中心になり子育て支援の拠点となっている。その他では、民間グループや社会福祉法人がある。そういうところが取り組みをし、熱意のある子育ての同僚みたいな人。保健師、教員、保育士の資格を持っている人。資格で働くという人たちも必要だが、資格とは別に同じ当事者ということで相談にのったり、一緒に活動したりすることの有効性があるということが、20世紀になったぐらいから言われており、その象徴が子育てひろば。子育てひろばや、民間の活動でやっている人たちは、当事者性をとても重視していて、当事者による当事者に対しての支援というものは、どんなに当事者の力になるかということが言われている。そういう人たちが市の事業に参加したり、ボランティア講座に行き、自分たちで何か別の団体を立ち上げて支援をするようになるのかなり支援の幅ができるのではないかなと思う。

それぞれの事業の連携がない中でやっているのと、どういう役割を果たしているのかというのが見えなかったり、役割がちぐはぐになる。子育てひろば交流会も、虐待防止のとっかかりであるし、「しらとり」の親支援講座なども虐待防止。虐待防止の施策という観点からいろいろな事業をやっている、うまくいっているのか。評価というのはとても大事で、府中市でやってると思うが、一体この事業を何のために、どこまでできたかという評価がない中で、件数だけでは評価にならないとの意見も先程でた。説明の中で、しらとりひろばの利用者の数、たち交流ひろばの利用者の数が減っている。しかし他のサービスが伸びているので減っているという可能性もある。数の問題でもなく、どういう状況になれば目的がある程度達成できたのかという生活指標を作るべきである。子ども家庭支援センターの事業だけでなく、府中市内の全ての事業をひっくるめて対応すべきと、市民は誰でも思っているが、それが実現できていないということなので、仕組みづくりを考えるべきというのが私の感想だ。

なかでも2つあり、1つは児童館。児童館は、子どもの日常生活を支援する場で遊びを支援しているが、児童福祉施設であるので社会福祉法に基づくと、福祉というのは地域での子どもであれ、お年寄りであれ、障害者であれ、地域生活を支援していく目的があり、児童館はそこが抜けていると思う。日本中の児童館が遊びしかやっていない。児童館で遊びを通して児童館の職員が子ども、親たちと信頼関係を

結び家庭の生活の安定につなげているのかというところが、これから問われてくるのではないかなと思う。虐待という施策のくくりで全部関連づけて評価していかないといけないというのが1つ目だ。

2つ目は社会福祉協議会。社会福祉協議会は、いろいろな団体をつくったり、団体同士のネットワークをつくるのは一般的に言って行政の職員よりもうまい。役所が全部自分たちの人的な資源だけでやるとなると限界を感じるので、助産師会等の方たちの力も使えばよいと思う。虐待の相談件数の約半分近くは学齢期というところで、学校、児童館、子ども家庭支援センターの三者が一定程度の枠組みをつくってやっていかないとと思う。

(2) 府中市子ども家庭支援センター事業進捗状況について

ア 府中市子ども家庭支援センター事業進捗状況について、資料3に基づき、事務局より説明。

イ 質疑応答、意見等

事務局 先ほど会長からの評価の話も、落とし込んでいければとは考えている。皆さんの意見をいただきこれをマイナーチェンジまたはフルチェンジしていく。

子ども家庭支援センターの運営会議などでは9事業を載せている。こちらで出た意見を先方に伝えて、連携しながら落とし込んでいこうと考えている。

あらたに事業が4月から始まる母子保健係とは十分に連携を図りながら始める。母子保健係の委員から何か補足があれば。

委員 まず、子育て世帯包括支援センターは、30年の4月から「たち」と連携でいくという形になるが、大きく変わるところは、母子手帳の発行の申請窓口が保健センターに一本化され、看護師等による面接が必ず入るところ。あとは、台帳をつくり妊婦さんが支援にのっているのか把握していくようにというところ。

それと、台帳の共有というところで、市の健康推進課、子育て支援課など課を越えて台帳を共有し、支援する形に変わってくる。評価はこの中ですということだが、子ども家庭支援センターの事業はここだけで解決するものというよりも連携してというところが多いかと思うが、この評価表の下をつくり、この会議でたたく、この辺はどうか。どのような形で進めていくのか。親会議のほうにも提出するのか。

事務局 提出はしない。

委員 しない。じゃあ、この会議。

事務局 親会議は、ここのベースがあるので情報が共通する。必要な事業を関連づけてまとめ直しており、連携がわかるような形、関係するものを集めながら、まとめていくのが良いかと考えている。ここで出た話は、必要に応じて上の会議に伝えることはできるので取捨選択しながら連携づけていく。

年間に開ける回数が決まっているので、必要に応じて事前に意見をいただくような形も含めて考えたい。

委員 こちらの9事業という形で評価する形か。

事務局 この事業ごとの評価については、思いつく限り分けてみて、子ども家庭支援セン

ターの事業がよりわかりやすいような状態での9事業という形にした。もうちょっとこういうものもわかるように出してほしい等、意見があれば反映することも可能かと考える。

委員 一番大事な教育である「ころりんクラブ」や「はいぼ」が抜けていると思う。「たち」は、虐待もあるが、広く子育て支援ということであれば、ひろばの交流事など一般的な講座も評価の対象に入れたほうが良いのではないかと。

事務局 あくまでベースであり、まとめ方についてはこれから検討する。

会長 来年度以降、今までどういう方向を目指して、どこまでやってきて、評価はこうなっているというのを担当課として整理して出し、皆が考えここで意見を言うことによりやりやすくなる。

府中市の行政評価にプラスアルファで、センターとしてつくろうというのは、意気込みがある取り組みだと思う。このフォーマットの仕組みについてこの項目を入れてみたらと思うが、いかがか。

委員 全国に先駆けて、府中市が虐待ゼロを目指すことは、マイナスではないと思う。子どもを府中市は大事に思っているというアピールにもなり、真剣に大人が考えていかなければいけない。

会長 日本政府は、虐待ではなく、子どもの貧困の問題に取り組むと言っているが、子どもの貧困をゼロにするとは言っていない。国によっては子どもの貧困をゼロにすると言い、当時は日本よりも子どもの貧困率が高かったが、日本より低くした国もある。虐待は少し違うので、難しいところはあるが、意気込みはわかる。こういうのに詳しい教育関係者は、教育評価というのはもう日々やっておられると思うが何かいかがか。

委員 取り組み内容が目標になるのか。何が目標でここに向けていくのかという方向性が目標なのか。

事務局 方向性と取り組み内容については、全体の大きな方向性のところを示した上で、目標というところについても少し含まれているが、進行管理の計画をこの目標にすればよかったという感じ。29年度の上側にある部分が行う予定で下に実績で、どんどんその計画に近づけていくようなイメージ、上の取り組み内容とか方向性に近づけていくようなイメージでつくっている。

委員 指標があり、その指標がどう実現できたかがわかる形になると、すごく見やすくなるのではないかと。

事務局 シンプルにわかりやすく、かつ丁寧にといいところは考えていきたい。

会長 計画とかもつくっているのか。

委員 難しい。個別のケースに対する評価や、対応の仕方も振り返る必要があるのかなと思う。個別ケースを1個1個やるのは大変だと思うが、あってもいいかなと思う。

会長 実際あったケースで、個人が特定されない様にした上で、実務者会議で集まり、そのケースを読んだ上で、連携がうまくいったかとかいうケース検討の研修会は必要で、医療部門などでは取り組みが進んでいる。福祉の分野は、遅れており、

そういった取り組みも必要だと思う。保育ではいかがか。

委員 保育の分野はより細かい数字、評価が必要になり、結果よりは、経過、進行状況がわかりやすくなるのかと今読んでいて思う。

16年前から「ポップコーン」という事業があり、保育園もそのあたりから地域の子育て支援に力を入れてきたと思うが、虐待に力を入れているのかと思う。このフォーマットとは別な印象になるが、支援を受けながら子育てをする時代なのだという印象。本日、新入園児向けの説明会をするが、支援、バックアップの言葉は強調し、苦しい時は、相談くださいと説明する。楽しんで子育てする親が減ってきた印象がある。市全体が子育てを応援しているということをアピールし、明るいメッセージを出していけばよいのではないか。

会長 具体的な事業の中でどう連携するのかというやり方の気づきのきっかけにはなる。警察という観点から何かあるか。

委員 市の派遣でフォーマットは見たことがあるが、内容については、よくわかっておらず申し上げられないが、この資料は、この会議で発言した内容が反映されていると感じた。こういったことを続けていけばと思う。

事務局 皆さんからの意見を真摯に受けとめ、反映させたい。情報をいただき「たち」の運営にどう生かしていくかという視点でつくっていくのがいい。連携、連絡を取りやっていくが、結果の表示だけとなるものもあるかもしれない。

包括支援センターが4月から開催するということで、保健センターとT委員から話があった「はぐ」が去年の10月に市の中で2か所オープンした。これが地域子育て支援センター、イメージでいくと「たち」の地域版で、様々な方に集まってもらい、課題のあるお母さんや、リスクがあるお子さんがいれば、そこから連携を図る。今は2カ所だが、年度は未定だが市内を6分割して6カ所に機関保育所を置き、その中で包括支援センターとも連携し、「はぐ」も含め、地域の需要の掘り起こしも含め今後できればよい。今年2施設できたので活用していきたい。「たち」は大きな施設なので、地域の隅々まで目が行き届かないところもあるので、協力いただき4月以降進めていきたい。

会長 私から少し具体的に言うと、このとおりにしなくともよいができる範囲でということ。

まず、一番基本は、府中市の行政評価の項目と関連していないとだめ。それを土台にしないとだめ。1つ目は、施策の方向と取り組み内容の間に1行でもいいので、これだと5年間書いてあるので、5年後の成果目標。つまりアウトカム。要はここまでしますよということを市民と自分たちの組織内に宣言する。方向性はこれでよい。しかし方向性だけだと100キロで行くのか、10キロで行くのかというのがわからないので、距離カウントが見えるような項目があったほうがよい。それが難しければ、成果指標を決めておいたほうがよい。参加者が増えれば、それで成果としていいのかというのものもある。そればかりではないと思うので、その成果指標ないしは成果が書かれる部分があったほうがよいというのが1つ目。

2つ目は、申し訳ないが施策の方向の内容で、虐待の未然防止、早期発見が目的ではないと思う。要は最終的に、子どもが地域で安定した形で生活を送れることが目標。そのための虐待の未然防止と早期発見それから生活の安定のための支援。ここは児童相談所が全くできないところで、市町村しかできないところ。児童相談所は里親さんや乳児院等児童養護施設に措置することができる。措置している間に親と面接もするが、親の生活を立て直すことは一切できない。それができる可能性があるのは市町村で、市町村が今の持っている施策で、親が安定して、子どもが再び家に帰ってこられ、安定した家庭生活が送れるのが最終ゴール。そこも書くといいのかなというのが2つ目。

3つ目は、市としての評価があって、今後の課題、展開、その下に「その他の意見」とあるがシステムとして可能であれば、まずここの場の意見もいれてもらい市の考え、その他の意見、次に市としての評価、自己評価、最後に今後の課題、展開としたほうが、ここで言った意見がどうなり、どう受けとめられたのかという応答性が文章として見えるのではないか。このような工夫があると良い。

事務局 こちらも検討する。できること、できないことがある。

会 長 判断は任せる。

事務局 検討し、次回のその前に皆さんに送付した方が、1回目のような形になるかもしれない。次回は初めての方もおられるのでその時には、本日渡したこの表が出てくると思う。次の回から見直していく。そのまま並行してその方向でいるので、しばらくこのままになるかもしれないが、これはあくまで口頭補足という形になっていくかと思うのでご承知おきいただきたい。

会 長 ダイジェストみたいな形でずっとあってもいいかもしれない。